

うしろにお化け鯉がいる、
ただそれだけをどうしても喜一に
教えてやりたかった。

「きっちゃん、きっちゃん、
お化けがいてるでェ、ほんまやでェ」



1978年 筑摩書房（『泥の河』収録）

Story

舞台は昭和30年、大阪。堂島川と土佐堀川がまじわり、安治川となって大阪湾に注ぐ。

その一帯に連なるように架かる3つの橋のひとつ、端建蔵橋。

そのほとりに住む8歳の主人公、板倉信雄。決して裕福ではないが、
食堂を営む父晋平と母貞子に愛情を注がれながら育てられている。

ある夏の日、食堂の対岸に一艘の舟が現われる。

母とともにその舟上で生活する姉弟、銀子と喜一との短く切ない交友を描く。

第13回（1978年）太宰治賞受賞作品。

作品の世界

端建蔵橋の畔に暮らしはじめたのは、宮本輝氏が5歳の時であった。

父の郷里である愛媛県南宇和郡から大阪市北区中之島7丁目に移り、9歳までここで過ごした。

『泥の河』で板倉一家が新潟行きを決めたように、宮本一家も富山行きを決める。

大阪の川の畔で暮らした4年間は『流転の海 第三部 血脈の火』にも描かれている。

「舟の家」と「泥の河」

『泥の河』は池上義一氏が主宰する同人誌『わが仲間』に「舟の家」というタイトルで発表された。宮本輝氏が作家を目指して修行中の時、池上氏に書き出しの十行をマジックインキで消されたというエピソードがある。この荒唐治とも言える助言が大きな啓示をもたらしてくれた、と『川三部作』ちくま文庫版あとがきに記している。『泥の河』は文章技法の壁を

乗り越えられた意味深い作品である。

※修行中、『泥の河』と『螢川』の両者を併せると13~14回、書き直しをしたそうだ。どちらも習作が『わが仲間』に発表されている。読み比べれば、作家が啓示によって得たものがわかるかもしれない。

「一生懸命に生きて来て、
人間死ぬいうたら、ほんまに
おかみたいな死におするもんや。」

馬車屋が死んだ。火焔烈な戦場で
でき無傷だった戦友も、帰還直後
にあっけなく死んだ。
父晋平が死後の人生を、新天地に
懸けるきつかけとなったこのフレーズ。
「柱」のどくしようなないほどのもろさが
晋平を覆い、居ても立っても居られなく
させた。しばらく糸を引く、強い
フレーズです。